平成１７年度試験研究課題設定のための要試験研究問題提案・回答書

（整理番号）	提案機関名	ＪＡあしがら
１２７ ※記入不要		

要望問題　キウイフルーツの貯蔵耐久性について

要望問題の内容　【　背景、内容、対象地域及び規模（面積、数量等）　】

平成15年度のあしがら産キウイフルーツが平年と比較すると貯蔵耐久性が落ちてきたので、その原因及びこれからの対策について検討願いたい。

※あしがら産キウイフルーツは貯蔵耐久性において全国でもトップクラスにて販売しております。

解決希望年限	①1年以内　[②2～3年以内]　③4～5年以内　④5～10年以内
研究対応区分	①研究所対応　②委託研究　③共同研究　④その他
対応を希望する研究機関名	[①農業総合研究所]（②根府川試験場　③三浦試験場　④津久井試験場） ⑤畜産研究所　⑥水産総合研究所（⑦内水面試験場　⑧相模湾試験場） ⑨自然環境保全センター

※　ここから下の欄は、回答者が記入してください。

回答機関名	農業総合研究所

部　　署：　生産技術部

対応区分　①実施　[②実施中]　③継続検討　④実施済　⑤調査指導対応　⑥現地対応　⑦実施不可

試験研究課題名　（①、②、④の場合）

キウイフルーツの栄養診断と葉面散布剤処理による高品質果実生産マニュアルの策定

対応の内容等

これまで農業総合研究所では、キウイフルーツの貯蔵性向上に向けた高品質化技術の確立に向け、あしがら農協、足柄普及センターの協力を頂き試験を進めてまいりました。平成１２年からの果実サンプルを分析すると、果実貯蔵性については年次間差が認められ、その年の気象条件等に左右されるようです。ここ数年では、平成１５年よりも１２年が貯蔵耐久性は低かったようです。４年間の現地調査の傾向としては、生産者（圃場）ごとに果実貯蔵性の傾向が認められ、貯蔵性の低い園は毎年低く、高い園は高くなるようです。

キウイ樹体内（葉柄汁液中）の栄養状態を分析すると、果実の細胞分裂期のカリウムイオン濃度が高くなると果実の貯蔵性が低くなる傾向が認められ、これはカリとカルシウムの拮抗作用から果実中のカルシウム含量が低下したためと考えられます。現在、対策技術として、カルシウム剤の葉面散布について散布適期を中心に検討しております。結果は今年度中に出ますので、次年度のキウイ生産には利用できるかと思います。長期的には、1月の貯蔵点検と葉柄汁液中カリウムイオン濃度による栄養診断から土壌中のカリ過剰改善も合わせた形で「果実貯蔵性向上マニュアル」を策定し現地で利用できるよう研究を進めます。

解決予定年限　①1年以内　[②2～3年以内]　③4～5年以内　④5～10年以内

備　考